

[国 語]

文章を論理的に構成するための構成表の改善

－段落の役割やつながりを明示する「論理的構成図」による試み－

須藤 昌幸*

1 主題設定の理由

意見文は、経験や出来事に対しての自分の思いや考えを筋道立てて述べた文章であるが、その目的は読み手から納得や共感を得ることで達成される。そのため、意見文を書く際に書き手は、考えの理由や根拠となる材料として何を収集するか、また、それをどう組み立てればよいかといったことなど、いわゆる文章の論理的な構成に苦心することになる。

この論理的な構成を子どもたちが行う際にしばしば用いられるものに文章構成表がある。構成表の形式は教師により様々ではあるが、その大体は「はじめ」「なか」「おわり」という区切りを用意し、そこに収集・選択した材料を書く順序にしたがって配列していくというものである。

しかし、こうした構成表が子どもの論理的な構成の助けになっているかという点必ずしもそうではない。それは、次のような問題点があるからである。

材料の収集・選択を終えた後に構成をするという手順が一般的である。しかし、子どもたちの書く活動の実際には、自分の主張の展開を試行錯誤しながら、それに応じて必要な材料を収集・選択するということも多い。つまり、収集・選択と構成が同時進行で行われるのである。したがって構成表は、どのように主張を展開していくか、そのためにどのような材料を収集するかなどについての思考を促し支えることができるものでなければならない。こうした点から「はじめ」「なか」「おわり」という構成表を見てみると、書く材料が予め収集・選択されている場合には有効であろう。しかし、単に材料を配列するというだけの形式であるなら、収集・選択と構成が同時進行で行われる場合に対しては、十分対応しているとは言い難い。

この問題点を克服していくためには、書こうとする内容を並列的にメモしていく形式の構成表を、書こうとする内容同士の論理的関係を表すことができるものへと改善していかなければならない。そのことにより、文章の組み立てが論理的になっているかどうかを構成表を見て確かめ、新たに材料を収集・選択したり、書こうとする内容の順序を入れ替えたりすることが可能になるからである。

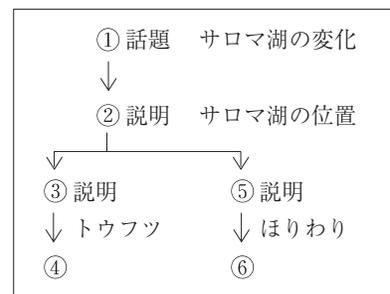
そこで、本実践では新たな構成表として「論理的構成図」を考案し、その活用を試みることにした。論理的構成図により、子どもたちが少しでも容易に文章を論理的に構成していくことができるようになることをめざす。そして、一人一人に自分の思いや考えが明確に伝わる意見文を書くことの充実感を味わわせていきたいと考え、本主題を設定した。

2 研究の内容と方法

(1) 論理的構成図の導入

本実践に当たり、図1のような「論理的構成図」を考案した。文章の読解活動でしばしば用いられる文章構成図を、書く活動に応用したものである。図中の丸数字は段落の番号である。「話題」「説明」は各段落の役割を示し、「サロマ湖の変化」等は、段落の内容を簡潔に表している。この図の特徴として、次のことが挙げられる。

- ・「話題」「説明」「例」等、段落の役割を示すことで、読み手を納得させる上で必要となる段落が充足しているかどうか点検することができる。



【図1 論理的構成図の概観】

* 長岡市立豊田小学校

- ・段落をつなぐ矢印をたどることで、それぞれに役割をもった段落が論理的に配列されているかどうか点検することができる。

実践ではこのような、必要な段落が充足しているかどうかの点検や段落が論理的に配列されているかどうかの点検を通して、自分の考えをよりよく伝えるための段落の加除や配列の修正を行うことができるようにする。書く材料の収集・選択と文章構成の同時進行である。

(2) 文章構成の基本的な考え方の提示

必要な段落の充足や論理的配列の点検結果に基づいて段落の加除や配列の修正を行うわけであるが、これを可能にする前提として、文章構成法の基本を子どもたちが理解している必要がある。ここで言う文章構成法の基本とは、自分の考えを明確にし、その理由や根拠となる材料を筋道立てて構成していくための手順や考え方である。実践では子どもたちに、次のことを助言していく。

- ・まず、文章の骨格となる要旨を明確にする必要がある。そのために、中心となる考え（意見）と、そう考えるきっかけとなった事柄（根拠）を簡潔にまとめる。
- ・次に、骨格部分である意見や根拠を支える材料となる「例」や「説明」、「理由」等を収集・選択する。
- ・文章全体の組み立てにあたっては「書き出しは話題から」、「問題提示から解決へ」、「具体例から意見へ（またはその逆）」など、効果的な展開パターンを用いる。

(3) 読むことと書くことの関連指導

文章構成の基本的な考え方や論理的構成図の使い方を理解するに当たっては、具体例を提示し分かりやすく説明する必要がある。そのための方策として、読むことと書くこととの関連指導を取り入れる。まず、読むことの学習で文章構成図を作成し、段落の役割や文章構成の方法を読み取る。次に、その学習経験をもとに、書く学習における論理的構成図の作成に入る。読む学習における構成図への理解をもとに、書く活動における論理的構成図の形式の理解を容易にするのである。また、読む学習で扱った意見文の論理的構成法を実際例として、書く学習における文章構成のパターンを考える際に応用していくことができるようにする。

3 実践

(1) 単元名及び対象児童 主題をはっきりさせて 5年生25名（男子15名、女子10名）

(2) 単元の目標 文章を論理的に構成し、主題をはっきりと伝わる意見文を書く。

(3) 指導計画（全9時間）

- ・文章例を読み、感想を話し合ったり学習の計画を立てたりする。（1時間）
- ・主題を決め、論理的構成図を作成する。（2時間）
- ・論理的構成図をもとに、意見文を書く。（2時間）
- ・書いた意見文を推敲し、清書する。（2時間）
- ・文集を作成し、意見文を読み合う。（2時間）

(4) 指導の実際

①読むことの単元における文章構成に関する事前学習

本単元に入る前、説明文「サロマ湖の変化」（教育出版5年、昭和62年）をもとに文章構成を理解する単元を設定した。そこでは、筆者の主張に対し自分自身の考えをもつという活動目標のもと、筆者の考えや考えの根拠を読み取る学習を行った。その際、筆者の考えの筋道を文章構成図により確かめる学習活動を行い、次のことを理解した。

○段落の役割

「話題」…これから先は、このことに関係する話ですということを読み手に伝えている段落。

「問題」…筆者がこれから言おうとすることを、まず、読み手に問いかけて考えさせている段落。

「意見」…「問題」に対する筆者の考えやいくつかの段落をしめくくるまとめを述べている段落。

「原因」…あることが起こるもとになっていることを述べている段落。

「結果」…どうなったか、または、どうなるかという、物事の結末や結末の予測について述べている段落。

「理由」…どうしてそう考えるのか、そうだと言えるのかというわけを述べている段落。

「説明」…前の段落の内容全体、または部分について説明している段落。

「言い換え」…前の段落の内容を要約したり、別な言い方で繰り返したりしている段落。

「例」…「意見」や「原因」、「結果」、「理由」等について、具体例を示している段落。

○文章構成図の段落を結ぶ線の引き方

- ・前の段落と内容がつながっている場合→前の段落番号から次の段落番号に向かって線をつなぐ。
- ・前に段落の内容についての「理由」（または「説明」、「例」等）の段落が2つ以上続く場合→前の段落番号から後ろの段落番号につなぐ線を途中で2本、3本…と枝分かれさせ、その先に後ろの段落番号を並べて書く。
- ・2本、3本…と枝分かれしている前の段落が次の段落で一つにしめくられる場合→枝分かれしているそれぞれの段落番号から次の段落に向かう線を途中で1本にまとめ、次の段落番号につなぐ。

○文章構成のパターン

- ・書き出しは「話題」から。
- ・これから説明しようとする「意見」や「理由」などを読み手に問かける「問題」にして、その後、言いたかった「意見」や「理由」を続けるようにすると、読み手は考えながら読んでくれる。[問題提示から意見へ]
- ・「意見」を言った後に「例」を示す。または、「例」を示してから「意見」を言う。そうすると分かりやすくなり、なるほどと読み手が納得してくれる。[意見から例へ（またはその逆）]

② 書くことの単元における文章構成の基本的な考え方の指導（材料の収集から構想）

伝える相手は特定の人でも、不特定の多数の人でも、あるいは自分自身でもよい。各々の意見文は文集にまとめ、互いに読み合うということを決めた後、10日間程、主題集めをし、ノートにメモしていった。そして、メモした主題の中から一番書きたい主題を選び、それを伝えるための構想に入った。

最初に、教科書教材「生き物を大切に」という意見文を読み、その構成を論理的構想図として表してみた。読むことの学習材「サロマ湖の変化」で構成図作成を経験してきたこともあり、論理的構想図の形式自体は、特に支障なく理解することができた。

次に、自分自身の論理的構想図を書く活動に入った。しかし、10分程たったところで進展状況を見てみると、書き進んでいる子は6名であり、大半の子は何を書けばよいかと悩み、行き詰まっていた。そこで、この機を逃さず、教材文に立ち返り、意味段落ごとの要点を確かめた上で文章全体の骨格を構成する考え方を理解する学習に入った。文章構成の基本的な考え方の指導である。

筆者は「生き物を大切にしよう」という主題を分かってもらうために、生き物が大切にされていない事実を書いている。このことに子どもたちが気付いたところで、「『大切にしようと言いたいときは、大切にされていない事実』『きれいにしようと言いたいときは、きれいにされていない事実』というように、『○○しようと思っきっかけとなった事実』を、挙げてみるとよい」と助言した。この助言によりまず、文章構成の骨格部分を構想することができた。(図2)

【図2 文章構成の骨格部分の実際例】

主 題	○○しようと思っきっかけになる事実
家に帰る時間を早くしよう。	帰る時間が遅くなると危険がたくさんある。
川をだいにしよう。	テレビで「今、川が危ない」という番組を見た。
教室をきれいにしよう。	そうじの時、教室をはいていると毎日、たくさんのごみが集まる。
体力をつけよう。	母に「あんたは体力ないね。」と言われた。

骨格が構想できたところで今度は、教材文の形式段落の役割への理解をもとに、文章構成の基本を確かめていった。まず、「生き物が大切にされていない例が書いてある」「大切にしない理由が書いてある」「大切にしないとどうなるか」という結果が書いてある」といった気付きから、どのような段落をそろえれば分かりやすい意見文を書くことができるか確かめた。次に、「○○しようという主題」と「○○しようと思っきっかけになる事実」という段落を中心にそれぞれについて、例や理由、結果などの段落が付け加えられて構成がふくらんでいることを確かめた。これにより、骨格部分を中心に「例」、「理由」など書くべき材料を収集・選択していくというやり方を理解していった。

そして最後に、書き出しは「クラスでメダカなどの生き物を飼っているという『話題』から入っている」「生き物が大切にされていないという例を書く前に、『生き物は、大切にされているでしょうか』という問題の文が入っている」という気付きをもとに、文章全体を展開するパターンを確かめていった。

こうした学習により、論理的構想図の作成に最初は行き詰まっていた子どもたちも徐々に書けるようになった。「問題」の解決策となるアイデアとしての「意見」があまり思い浮かばなかったり、読み手になるほどと思ってく

れるほどの「理由」が考えつかなかつたりしたために、自分から助言を求めてきた4人の子どもを含め、25人全員が予定した時間内に論理的構成図を書き上げることができた。

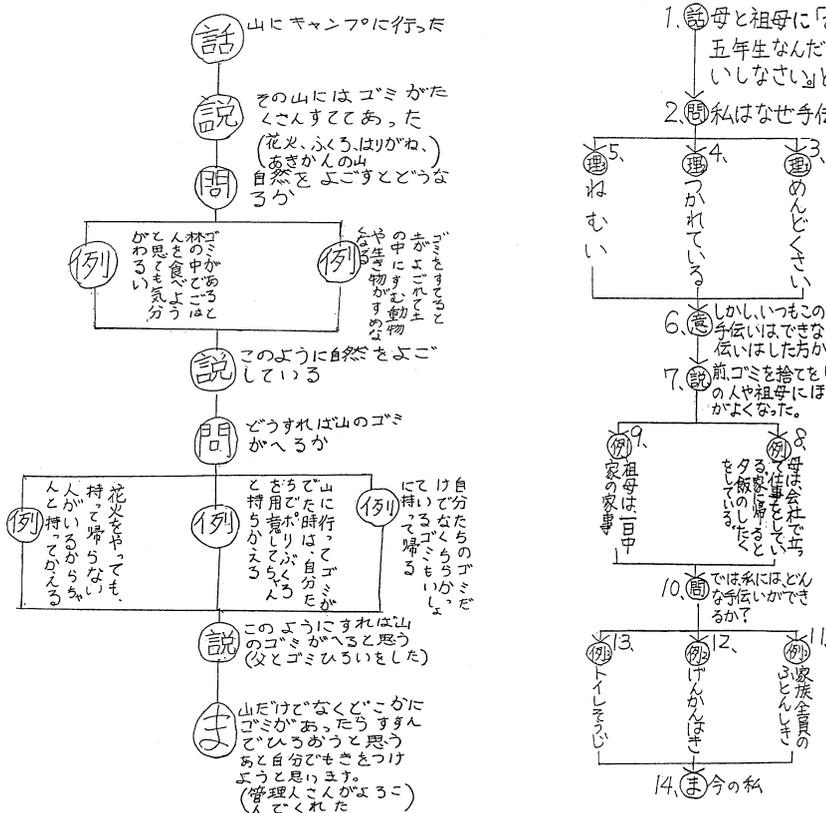
③ 論理的構成図の作成の実例

論理的構成図の書き方は、最初の段落から次の段落へと順に書いていく子もいれば、骨子部分を先に書き、その上下に必要な段落を付け足していくという子もいた。そうした中、どの子も書いては消し、また書いては消しという加除修正の様子が見られるなど、論理的構成図の上で思考錯誤が行われていることがうかがえた。本単元以前の書くことの学習で、出来事を最初から最後まで羅列して書くタイプであったT児、また、場面の中心を決めて様子や気持ちを書くことができるタイプであったS児、この両タイプの論理的構成図を見てみる。(図3)

T児は山に捨てられたたくさんのごみを見た経験から、「自然をよごすとどうなるか」と「どうすれば山のゴミがへるか」という2つの「問題」を設定した。そして、それぞれの「問題」について熟考を重ねた上に得られた自分なりの意見を「例」として記述するに至った。また、自分の論理的構成図を見直す中で、「自然をゴミでよごすとどうなるか」という「問題」と「車の排気ガスで植物が枯れる」という「例」が結び付いているのはおかしいと気づき、排気ガスの例を削除した。T児は、問題提示から意見へという構成パターンを基本に材料を収集・選択し、また、それぞれの段落のつながりを点検することで論理的構成図を完成させることができた。

S児は、「5年生なんだから手伝いをしなさい」と言われた出来事から「私はなぜ手伝いをしないのか」、「でも、母や祖母は仕事で疲れている」、「では、私には、どんな手伝いができるのか」というように、自分自身の心の移り変わりを語るように、①段落から②段落へ、②段落から③段落へと、順々に段落をつないでいった。その中で自分自身の内面を見つめ直し、そこで気付いた自分自身の思いを「理由」や「例」として記した。また、論理的構成図を一通り書き上げたところで、手伝いをしない理由のすぐ後に母や祖母が疲れている例が来るのではうまくつながらないと考え、「手伝いはしたほうがよい」という「意見」とその「説明」を付け加え、完成した。

他の子どもたちもT児やS児と同じように、試行錯誤を繰り返しながら材料を増やし、また、段落のつながりを確かめながら論理的な構成を成し遂げていった。書き終えた論理的構成図について数名の子どもに対し、書き足した方がよいと思われる所や、内容やつながりが適切でないと思われる所を指摘したが、構成の大筋を変更するような指導は必要なかった。



【図3 論理的構成図の実例 左はT児、右はS児】

④ 論理的構成図の作成から記述へ

論理的構成図が完成したところで記述へと進んだ。その際、次のような助言をした。

- ・ 出来事や意見は、頭（→考えたこと・気付いたこと）、心（→気持ち、感じたこと）、目（→見たこと）、耳（→聞いたこと）、口（→話したこと）を働かせて詳しくするとよい。
- ・ 詳しくしたことは、論理的構成図にメモとして書き込んでいくとよい。
- ・ 書く前だけでなく、書いている途中でも後でも、気付いたことはどんどんメモしたり書き足したりする。
- ・ 「例」などが続くときは、「第一に、第二…」等の語句を使うとよい。

書く内容に関して論理的構成図に表してあるのは段落の役割と要点だけである。したがって、記述に入る際には、要点を具体化する作業が必要になる。子どもたちがその作業を円滑に行い、より分かりやすく記述していくことができるように配慮した助言であった。こうした段階を経た後、推敲し書き終えた。図4はT児の意見文、図5は、S児の意見文である。

【図4 T児の書き終えた意見文】

ふえるごみ T児

山にはごみがたくさんある。ちょっと辺りを見渡すだけで、すぐ見当たる。花火やふくろや針がね。他にもいろいろなごみがある。「空きかんをすてないでください」と書いてあるのに、50個くらいの空きかんが投げこんであるところもあった。

管理人さんがそうじをしているのに、どうしてこんなにごみがあるのだろう。それは、「どってことないだろう」という気持ちですてた人がいたからだと思う。そういう人は山をごみでよごすとどうなるか、考えてみてはどうだろうか。

まず、ごみがたくさんある林の中でごはんを食べようとしても気分が悪い。それに、せっかくの景色がだいなしになってしまう。さらに、山にごみをすてると、土がよごれて土の中に住む生物や動物が住めなくなる。

では、どうすれば山のごみが減るのだろうか。

ごみの中で一番多かったのは、花火だった。花火を持ってキャンプに来る人がそれだけたくさんいるということだろう。しかし、一人一人が自分の出したごみを持って帰れば、これだけのごみが出ることはない。つまり、山に行つてごみが出たときには、自分でポリ袋を用意し、ちゃんと持ち帰ればよいのだ。また、自分たちのごみだけでなく、ちらかつているごみもいっしょに持って帰ることも大切だ。

みんながこのようにすれば、ごみが減ると思う。キャンプから帰るとき、ごみがたくさんあったので、ほくと父でポリ袋を持ってきて、空きかんや針がね、ビニルを1時間くらいできれいにした。そうしたら、管理人さんが、

「ありがとうございます。また、来てください。」

と言ってくれた。これからも、どこかでごみを見つけたら、進んできれいにしようと思う。

【図5 S児の書き終えた意見文】

母と祖母の手伝い S児

ある休みの日。私がかねころがってテレビをみていたときのことで。

「あんた、もう5年生なんだから、手伝いくらいしなさい。」

とつぜん、台所の方から朝食の片付けをしていた母と祖母の声が聞こえてきました。しかし、私はとうとう手伝いませんでした。

「そんなこと言つたって、休みの日はゴロゴロしていたいよ」と思っていたのです。

たしかに私は、5年生になっているのに、あまり手伝いをしません。なぜかというと、一つ目は、めんどくさいからです。食器を洗ったり、ふとんをしいたりと、細々としたことが苦手なのです。

二つ目は、つかれているからです。水泳部で泳いだりランニングをしたりして家に帰ると、手伝いをする元気はありません。6時ごろ帰ってきて、夕飯を食べて宿題をやると、もう9時ごろになってしまい、すぐにねてしまいます。

このようなことから、いつも手伝いはできません。しかし、本当はした方がよいと思っています。

以前、こんなことがありました。朝、玄関を出ようとしたらごみぶくろがあるのに気付きました。収集場所に捨てるんだなと思って、捨てに行きました。帰ってくると祖母が、

「朝の仕事が一つこれで片付いたわ。どうも、ありがとう。これからもやってね。」

と顔をニコニコさせながら言ってくれたのです。私も何だかうれしくなって気分が明るくなったみたいでした。

母は、いつも会社で、立って仕事をしています。家に帰ってくると夕飯のしたくもします。父がいないときは、犬の散歩にも行かなくてはなりません。たくさん仕事をしているので、

「かたがこつた。かたがこつた。」

と言っています。祖母は、いつも母が会社に行っている間、家の家事と病気の祖父の世話をやっています。台所で立って

仕事をしているので、

「ひざが痛い。」

と言います。

どこが痛くても、私たち家族のために、一生けん命に働いてくれる母や祖母が少しでも楽をして喜んでくれることは、私にとっても気持ちのよいことなのです。私はどこも痛くないし、家族の中で一番若いので、家族のために手伝いをしていかなければならないと思います。

そこで、私にどんな手伝いができるのか、考えてみました。そして、まずこの三つからやってみることにしました。一つ目は、家族全員のふとんしき。二つ目は、玄関はき。三つ目は、トイレそうじ。この三つが毎日続けられたら、一つずつ手伝いを増やしていこうと思っています。

ついこの間、トイレそうじをしていた私に母が、

「この前の言葉がきいたの？」

と不思議そうに言いました。でも、とても喜んでいました。

4 考察

子どもたちの書き終えた意見文を評価した結果は図6の通りである。

【図6 書き終えた意見文の評価結果】

書き終えた意見文の評価基準	該当数
A：論理的な文章構成及び十分な材料により、主張やその理由・根拠がよりよくわかる文章を書いている。	18人
B：論理的な文章構成により、主張やその理由・根拠がわかる文章を書いている。	7人
C：論理的に文章を構成して文章を書こうとしている。	0人

25名全員が目標とする論理的な構成を成し遂げ、さらにA基準に達する子どもが7割を超えた。これは、これまでの筆者自身の実践では得られなかった高い達成率であった。そのため、文集が完成し読み合ったときには、「〇〇さんの意見文を読んで、私もお手伝いをしようと思いました。」「川がよごれる原因がよく分かりました。ほくも、絶対にごみは捨てません。」等々、互いに賛同の意見をもらい、自分の主張が伝わった喜びを感じ合うことができた。

全員がB基準以上を達成することは、論理的構成図を作成した段階でおおいた予測できた。子ども自身が、考えの理由や根拠となる材料として何を収集したらよいか、また、それをどう組み立てればよいかということを論理的構成図の作成を通して実によく考え、自分なりの答えを出しながら構成活動を進めていたからである。論理的構成図は、言わば、段落構成の図式化とも言え、自分自身の論理構成を視覚的にとらえることを可能にしている。そのため、論理の整合性を確かめ、加除修正を行う上で十分に役立つことができたのである。

5 成果と課題

一人一人が少しでも容易に論理的な文章構成を行うことができるようになることを願って取り組んだ本実践であったが、本実践で考案し活用を試みた「論理的構成図」が有効に働き、その目的を達することができた。一人一人のものの見方・考え方に多少の差はあるものの、大きなつまづきもなく全員が論理的な文章を書き上げることができたのである。

今後は、意見文を書くことを通して物事の本質に触れ、新たな見方・考え方を獲得し、自分なりの見方・考え方をより一層深めることができる学習活動をめざし、工夫・改善に取り組んでいきたい。

【参考文献】

井上尚美・大熊徹『授業に役立つ文章論・文体論』教育出版、1985年

田中久直『段落指導—その原理と方法』明治図書出版、1960年

森岡健二「表現と効果」『講座 現代語4 表現の方法』明治書院、1963年、1～22pp

国語教育研究所編『国語教育研究大辞典』明治図書出版、1991年、290～295pp